

# ラホヤ村通信

(2)

高垣愉佳

## 1. ファミリーペット

サンディエゴ国際空港に到着した。綺麗だが、そんなに大きくは無い、こじんまりした空港だった。伊丹空港くらいの規模だろうか。

到着してすぐに行った場所は、トイレだった。トイレで最初のカルチャーショックを発見した。何とペット用のトイレがあったのだ。きちんと表示もあり、人間用とは別に、人工芝のような物の上に犬に配慮したと思われる赤いポールまで立っていた。そういえば、飛行機の中にも犬を連れてくる人が居た。盲導犬などではない、小さい犬をバッグに入れて足元に置いている人が居た。

コンドミニアムの周りでも、犬を連れて散歩している人達をたくさん見かける。犬を飼うのは大人気だ。ワンレングスのロングヘアーにショートパンツにビーチサンダル、それにサングラスをかけて、犬を連れて歩くのがカリフォルニアガールの典型なのだそう。私も不動産屋さんから「ここはファミリーペットだから、犬や猫を飼ってもいいのよ。要る？」と聞かれた。

ファミリーペットの意味は、『動物可』くらいの意味だろうと思っていた。ところが、どうも意味合いは違っているらしかった。

サンディエゴは、どちらかというと砂漠

に近いくらいに乾燥していて、毎年夏から秋にかけて山火事が発生する。今年は、初夏に入った頃に連日 35 度を超える日があり、案の定あちこちで山火事が発生した。山火事は郡内 7~8 か所にも及び、国道が閉鎖され、遂には非常事態宣言まで発表される事態となった。なぜ山火事くらいで非常事態宣言なのかと言うと、サンディエゴにはカールスバッドと言う所に原子力発電所があり、その原子力発電所のすぐ横まで火の手が迫っていたからだった。

yahoo ニュースで、「アメリカカリフォルニア州、山火事で非常事態宣言」という記事が載る数時間前に、政府からメールで非常事態宣言の通達が届いた。非常事態宣言にも驚いたが、そのメールの内容にも驚いた。メールの内容は、だいたい次のようなものだった。

「現在サンディエゴ郡の郡内数か所で激しい山火事が発生しています。国道の閉鎖は明日も続くものと思われます。一般道路に火の手が迫っている場所もあります。サンディエゴ郡下の公立学校は、明日は全面休校します。公立でない学校、企業に関しても、自分が危ないと判断したら、明日は休んでください。皆様自身と、そのご家族、そしてペットの安全を第一に確保してください。」

公的機関からの通達にペットの一字が入っているということは、逆に考えると、この一字が入っていなければ、法律にか社会通念にかは分からないが、とにかくまずい社会なのだろうと思った。

昔、大学や大学院で、『家族の定義は時代や社会、また個人によって変わる』ということを知ったが、本当にその通りだった。福島の原子力発電所事故の時、日本ではペットを連れて避難することは許されなかったと聞いている。日本とここでは、公に認められる家族の定義が異なっているようだ。



空港のペット用トイレの入り口。

## 2. 介護の資格

日本では介護を担う人の数が確保出来ないで、もっと簡単に取れる資格の整備を進めていくというニュースを見た。日本で介護を担う人の数が確保出来ないのは、資格の難易度が高い為なのだろうか？

私のキャリアスタートは今から 20 年近く前、介護からだった。初めの職場には 3 年ほど勤めた。まだ介護保険が導入される前だったが、何かの役に立つかもしれないと思い、ホームヘルパー 2 級の資格を取っ

た。そして次は介護福祉士を取ろうと思って勉強していた時に、看護師か理学療法士になる気はないか？と勧められた。それぞれの仕事の違いについてしっかりと認識していなかった私は、学費を出してもらえることに喜んで、3 か月後に控えた介護福祉士の受験を取りやめ、介護から看護の道に進むことをあっさりと決めた。

そういう経歴の私は、アメリカでもケアアシスタントになる為の教育を受けた。コミュニティーカレッジの無料 ESL に通っていたある日、クラスに見慣れない先生がやってきた。青い目に、あごまでの金髪のおかっぱ頭、背は低いが非常にエネルギッシュで、そしていたづらな子猫のような笑顔を見せる女性だった。彼女は手に持ったチラシを配りながら、彼女が担当するクラスの宣伝を始めた。それが、『pre Care Assistant』の VESL コースだった。VESL というのは Vocational English as a Second Language の略で、英語を母国語としない人の為の専門教育クラスで、簡単に言うと移民の為の職業訓練クラスのようなものだ。年に 4 回程度行われる州の英語テストで、一定以上の点数を取った学生は自分の興味に沿った VESL への参加が可能になる。ケアアシスタント以外にも、整備士のクラスなど様々な仕事に結びつくようなクラスが用意されている。移民の力をいわゆる肉体労働者として使えるようにする事が目的ではないかと思う。このシステムはとても興味深い、今回はケアアシスタントのクラスの話に戻りたい。

カリフォルニア州には日本の介護福祉士の代わりにケアアシスタント (Care Assistant) という資格があるらしい。通常

は、コミュニティーカレッジのケアアシスタントクラス（10 週間程度）を受講した後に、州の試験を受けて合格すれば資格をもらえるという仕組みになっている。英語を母国語としない人に対しては特別のクラスが用意されていて、まずは通常の倍の時間（20 週間程度）をかけて同じ内容を習う。クラスを修了後、更にもう一度、今度は英語を母国語とする人たちと一緒にクラスを受講した後に、州の試験を受けるという 2 段階の教育が用意されている。

クラスで使うテキストは、通常のクラスも VESL のクラスでも同じテキストを使う。違う点は授業時間の割り振りだ。VESL のクラスでは、授業の 3 分の 2 以上を英語の授業にさく。アメリカなのだから、VESL であろうと通常のクラスであろうと、どちらにせよ英語だろうと突っ込みたくなるのだが、同じテキストは使うが『誰が』その授業を行うかという点が通常のクラスとは異なる。通常のクラスの講師は看護師が担当するが、VESL の講師は実技を除いて英語の教師が担当する。VESL ではテキストの内容よりも、間違わずにテキストを読める英語力、間違わずにカルテ記入が出来る英語力、間違わずに看護師へ報告したり患者さんに声掛けが出来る英語力、という点に着目した授業が行われる。テキストの内容の深い理解などは、この後通常のクラスに進んでからやればよいということで、重要ポイントに関しては看護師も説明するが、着目しているのは誤解なく理解できる程度の英語力の育成のようだった。「間違わず」と聞くと、どんなに高いレベルの英語力を要求されるのかと思うかもしれないが、日本で高校まで出た人なら多分退屈になるよ

うな英語ばかりが続く。そもそも、アメリカ人がテキストとして使うような本はとても簡単な英語で書かれているし、カルテの記載にしても「簡潔に！」ということが要求されるので、何とか節などという難しい文法を使ってただだと書いたりすることはまず無い。だから、中学英語があれば十分だ。ただし、確かに「間違わず」というのは難しかった。私はしょっちゅう三単現の S と呼ばれるものを忘れてたり、ing のつけ方を間違ったりして、これでは現場では使えないなと自覚した。そして、全く流暢とは程遠い、まるでターザン語のような私の英語では、ケアを受ける患者さんがびっくりすること間違いなしだと思った。

英語の話はさておいて、日米の内容の違いが面白いなと思った。そもそも、日本ではキャリアとして介護と看護は一続きになっていない。実際には日本にも、私のように介護の世界から看護の世界に入るいわゆる「たたきあげ」と呼ばれる人たちはたくさん居る。そしてそういう人たちの中には、更にケアマネージャーへの道へと進む人たちも居る。日本でも、現実としてはそうになっているが、制度的には介護と看護は別々の制度で動いている。介護の分野でいうとホームヘルパーと介護福祉士の講座を受講した事があるが、講師はたいてい介護福祉士がつとめていた。介護のクラスで看護師を目指すことを勧められることなど、皆無で、むしろ介護と看護の違いを強調されたりする。私が受けた教育の中では、介護は福祉の一部分であり、看護とは異なるという方向性だった。一方、アメリカではケアアシスタントのクラスの講師は看護師が行う。そして、授業の中で繰り返し、このケ

アアシスタントクラスはケア分野のキャリアの第一歩であり、この先、看護師になり、更に頑張る気があれば医師を目指すくらいの気持ちで行うようにと繰り返し勧められる。日本では介護と看護助手は似て非なる職種のように扱われているが、アメリカではいわゆる老人ホームで働く介護労働者も、大病院で看護助手を行う人も、皆同じ『ケアアシスタント』の教育を受けた人たちが担うのだそうだ。「介護と看護は違います。看護と医療も違います。」と強調する日本と、「介護と看護と医療は担う専門は異なるが、同じケアという場で働く仕事であり共通点が多いのだ」という点を強調するアメリカ。このように強調点が異なるには、それらの職種が置かれている社会背景の違いが間違いなくあるだろうと思うが、チーム医療やチーム介護という観点から見れば、各分野が分断され対立構造に置かれている日本は分が悪いのではないかという気がした。

話を初めに戻そう。日本は資格を取るのが難しいから介護を担う人が足りなくなっているのか？という点に関してだ。個人的には否で、日本で資格を取るのは比較的簡単だと思う。国家試験を受験して介護福祉士になっている人では見たことは無いが、ホームヘルパーにしても、介護福祉士を専門学校卒で自動的に取得した人にしても、漢字が読めないし書けないような状態でも資格をもらっているような人が少なからず居る。お金を払って受講して、その時間そこに通えばもらえるような資格システムだから、このような事が起こり得るのではないか？これは介護系の資格に限ったことではなく、『平等』という概念の取り違えから生じていることのように思う。ここ数十年

だろうか、日本では「機会の平等ではなく、結果の平等を」という事がスローガンのように言われ始めた。小学校などのかけっこでも、走る機会を平等に与えるのではなく、皆で一緒にゴールのテープを切るのが結果の平等だということで、足の速さによってスタート地点を変えてまで一緒にゴールするのだそうだ。これを介護の資格にあてはめて考えてみると、一つ一つの行為を行う科学的根拠まで頭に入れて介護を行う人も、漢字の読み書きもままならずテキストをちゃんと読んでいるかどうかすら怪しい人も、同じお金を払って同じ時間受講したのだから一律に資格を与えましょうということになるのだろう。

アメリカで私は英語が出来ないという大きなハンディを背負っていた。そういうハンディを背負う人たちに対して、アメリカは時間をかけて段階を追って学んだ末に資格試験を受けて合格するというシステムを用意していた。アメリカで英語が出来ない状態というのは、日本にあてはめたら、まさに私は、漢字の読み書きがままならない状態（よりもっとひどい状態かもしれない）にあったと言えるだろう。「結果の平等」とは、ハンディを見なかった事にして一律に結果を与えることか？それともたとえ資格取得までの期間が他の人の 3 倍かかろうとも、ハンディのある人はハンディのある所からスタートして、ハンディの無い人と同様のレベルのケアを提供出来る所まで行くことか？システムの整備としては前者の方が圧倒的に楽だと思う。講座を開講して期間が終了したら資格を発行すれば良いだけなのだから。だが、そのしわ寄せは誰に行くのだろうか？結局は介護を受ける人たち

にしわ寄せが行くのではないのか？そして、そのようなシステムを作ろうとしている人たち、そしてそのようなシステムの恩恵にあずかって資格を取得する人たちも、いつの日か介護を受ける側にまわり、『そのしわ寄せを自分が受けることになる可能性がある』、ということを忘れてはいないだろうか？



クラスで使用していた実技の練習用人形。名前はミセス・ガガ。

### 3. ハッピーホリデー

アメリカは西洋。西洋と言えば何となくキリスト教。キリスト教と言えば、何となくクリスマス。とつい思ってしまう。もちろん日本に比べると、キリスト教を信仰している人の割合が格段に高いというのは事実だ。そして、クリスマスはキリスト教の教祖イエスの誕生日であり、キリスト教にとってとても大切な日であることは間違いが無い。

が、街中のクリスマスに対する力入れ具合に関しては、実は日本の方がすごいかもしれないと思う。アメリカでも家などをイルミネーションなどで飾る人たちは沢山居る。けれども、街中に「Merry Christmas!

と書かれたポスターやリーフで埋め尽くされたり、ショッピングセンターで「きよしこの夜」などの讃美歌が流れるというような事は無い。極め付けに驚いたのは、「クリスマス用ケーキのご注文承ります。」という張り紙を、日系スーパーと日本人が経営しているケーキ屋さん以外ではついぞ見かけなかったことだ。

これには、アメリカの歴史と関連した深い事情があるのだということを、ESLのクラスで習った。私たちは、アメリカは西洋だといふ思い込みがちなのだが、アメリカという国は移民によって創られた、新しいタイプの多民族国家なのだそう。だから、キリスト教徒以外にも、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教をはじめとして、ありとあらゆる宗教を信仰する様々な民族の人が居る。というわけで、キリスト教のお祭りだけを特別扱いするのはよろしくないという理由で、アメリカではクリスマスシーズンになっても、そんなに街中がクリスマスムードに染まることは無いのだそう。 (一つ一つの祭りの詳細は割愛するが、) ちなみに、12月にはユダヤ教にとってとても大切なお祭りの『ハヌカ祭り』というものもあり、またイスラム教の人たちの『ラマダン』もあるらしかった。



ユダヤ教のハヌカ祭りで使われるハヌキヤと呼ばれる蝋

燭。9本の蝋燭には意味がある。

というような事情から、街中がクリスマス一色になることは無かったが、その代わりに 10 月のハロウィンを皮切りに新年まで続く『ホリデーシーズン』というものがあった。スーパーのレジで、レストランで、バスの運転手さんも、道ですれ違う人たちも、みんながお互いに笑顔を添えて、「ハッピーホリデー！」と声を掛け合う。それは、日本のイルミネーションよりも、街中に流れる讃美歌よりも、心温まる美しい光景のように感じられた。 **Happy holiday!**



ファーマーズマーケットで、地域の施設の人たちが作ったシーズングッズを売るお店。